

# 日本体操学会 会報 vol.22

2026.3 発行

## ご挨拶

日本体操学会会長 大塚 隆

日本体操学会第25回学会大会が、令和7年9月27日(土)～28日(日)神戸女子大学三宮キャンパスにおいて「みらいのインクルーシブな体操」をテーマとして開催されました。関西地区では平成27年の京都学園大学(現在の京都先端科学大学)以来、10年ぶりの学会大会でした。EXP02025大阪・関西万博「いのち輝く未来社会のデザイン」の閉会が間近に迫った中、神戸は大いに盛り上がりました。

第1日目は神戸女子大学の田中裕一先生による基調講演「Diversity & Inclusion 時代の身体の動きの教え方のヒント」が行われました。「私たちのことを私たち抜きで決めないで(Nothing About us without us)」「君はどうなりたいかを聞く」という言葉が心に響きました。続いて行われた公募研究発表、口頭発表、ポスター発表は、発表者と参加者の皆さんによる積極的なディスカッションや情報交換の場となりました。

第2日目は松浦早希氏による「朝の体操」からスタート。大阪・関西万博のテーマソングに合わせて楽しく体操ができました。名古屋芸術大学の細川賢司先生によるインクルーシブな体操実践のワークショップでは「おもろイズム」を動いて学びました。シンポジウムは「インクルーシブな体操の在り方を検討する」をテーマに、引き続き名古屋芸術大学の細川賢司先生、神戸女子大学の上野昌稔先生、神戸市立下畑台小学校の水金稔先生にご登壇いただきました。この学会大会を通して、インクルーシブな共生社会の構築に向けて、まずは現場を知ること、実際に経験すること、そして「何ができるのか」「何がしたいのか」をみんなで話し合い考えていくことの大切さを学ぶことができました。

## 日本体操学会第25回学会大会報告

第25回学会大会が、神戸女子大学三宮キャンパスにて開催されました。

- 開催日：令和7年9月27日(土) 基調講演、公募研究発表、研究発表等  
9月28日(日) 朝の体操、ワークショップ、シンポジウム等
- 主催：日本体操学会
- 後援：兵庫県教育委員会  
神戸市教育委員会
- テーマ：  
みらいのインクルーシブな体操



## 基調講演

神戸女子大学の田中裕一氏より「Diversity & Inclusion 時代の身体の動きの教え方のヒント」と題した基調講演が行われた。田中氏は、特別支援教育に長年携わってきた立場から「その人に合った支援を本人と共に考える姿勢」が非常に重要であると話していた。続いて、身体の動きを教える際には「年齢や能力、状況に関わらずできるだけ多くの人が利用可能」であるユニバーサルデザインの7原則を踏まえ、学習者の特性に応じて情報提示や環境設定を工夫する必要性が示された。また、動きを真似できない、リズムに乗れないといった困難の背景には多様な要因があり、その原因を考えた上で、必要な手立てを考えることの大切さが具体例とともに述べられた。最後に、教員自身が学び続け、チームで支える姿勢こそがD&I時代の教育の基盤であるとまとめられた。講演では、アイスブレイクを織り交ぜながら参加者でゲームを行ったりする内容もあり、楽しく学びの多い時間となった。



## 研究発表(公募研究・口頭発表・ポスター発表)

研究発表では公募研究の発表が1題、口頭発表が4題、ポスター発表が14題と研究発表や実践報告が活発に行われた。

公募研究の発表では「The Taiso」の運動強度比較が注目を集めた。若年成人を対象に、心拍数・Mets・Borgスケールで3種の体操を比較した結果、基本系が最も高強度で、簡易系・ストレッチ系は有意に低強度という結果となり、体力低下や配慮の必要な対象にも指導しやすい選択肢となることが示されていた。

ポスター発表では理論研究はもちろん、体操実践・教材開発まで幅が広く、発表者と参加者が新たな知見を共有し、現場での活用を議論している場面が多く

見られた。まさに現場にも直接活躍の発表が多くされていた。全体として、大会テーマ「みらいのインクルーシブな体操」を体現する内容で、交流と学びが促進されていた。体操の実践と理論が相互作用をもたらすことができた研究発表であったといえる。



## 朝の体操

2日目は、松浦早希氏(神戸市立友が丘中学校)リードの朝の体操で始まった。大阪万博2025のテーマ曲を使い、わかりやすいインストラクションと軽快な動きによる体操だった。前半は全員同じ方向で、中盤から全体で大きな輪になり、一体感を持って楽しく動くことができ、朝のスタートにぴったりの体操だった。皆、いつもながら、すぐに動きを習得でき、体操学会参加者ならではの感じさせられた。



## ワークショップ

### 科学的根拠に基づくインクルーシブな体操実践 - 運動の苦手な子どもに対する個別的配慮とケーススタディ -

名古屋芸術大学の細川賢司氏によるワークショップは、運動が苦手な子どもへの理解と支援を Update するという目的で行われた。

昨今増えているとされる発達障害の子どもたちの中には、発達性協調運動症である子どもも多く見られる。ワークショップでは、その支援のアイデアとして、様々な道具を使いながら身体を動かす体験をし、さらに体験の中で新たな工夫が紹介された。これらのアイデアは、そのような子どもに限らず、運動の協調性を高めるために、幅広い人に使えると感じた。

まとめとして、①運動の苦手さには様々な要因があり、その理解が徐々に深まってきていること、②運動の苦手さがスペクトラムであることを認識することが重要であること、③個々の子どもに応じた柔軟かつエビデンスベースドな対応が可能になることが示された。

\*「スペクトラム」：疾患の一つひとつが連続してつながっているものという捉え方



## シンポジウム

### インクルーシブな体操の在り方を検討する

名古屋芸術大学の細川賢司氏、神戸女子大学の上野昌稔氏、神戸市立下畑台小学校の水金稔氏による発表がなされた。

細川氏は、「神経発達症を対象とした運動・スポーツを通じた支援に関する研究の動向」という演題で、運動により認知的側面や中核症状の改善がみられることの研究や画期的な支援法として CO-OP(コアップ)アプローチがあることが紹介された。サポートネットの構築を図りいろいろな方と連携することが大切でありエビデンスに基づいた支援の必要性をご自身の研究と重ねて話された。

2人目の上野氏は、特別支援という教育現場に携わり、学校長や行政職に携わられた経験から「神戸市における特別支援学校での広義の『体操』に関する取り組みの実際」として具体的な現状を話された。先進的でインクルーシブな取り組みをしている学校の報告は大変興味深く刺激を受けた。体操は生涯教育につながる大切であり、主体的な学習がやがて運動を好きになることにつながる。技能面だけではなく情緒面の向上のためにコンテンポラリーダンスなどを取り入れている様子などが報告された。

3人目の水金氏は、神戸市立の現役校長先生ということで、子供たちの実態と広く学校教育現場に関しての話がされた。最後に参加者の先生方へのお願いとして、ご自身がかかわっている地域の学校現場をサポートしてくださいとフロアに向けての言葉があった。

各シンポジストの話しを聞き、「人は人によって人になる」という神戸教育委員会の理念が合致した。参加者は新たに特別支援教育への使命感を持つことができ、大変有意義なシンポジウムであった。



編集：日本体操学会広報委員会（鞠子佳香、鈴木玲子、砂田真弓、大友康幹）